

「建国音頭」一戦時下の国策輪踊りに埋め込まれた新日本文化一

小林敦子 (明治大学)

建国神話に基づき紀元二千六百年にあたる昭和 15 年 (1940)、年間を通して全国で記念行事が行われた。本研究は、その内の 1 つ「皇紀二千六百年奉祝芸能祭」において、専門家に委嘱され新たに創作された舞踊部門の制定作品「建国音頭」を対象とする。主催の日本文化中央連盟は日本が明治維新时期以来、欧米文化を無批判に受容してきたとして批判し、昭和 15 年当時の日本の芸術を総動員することによりその成果を世界に伝え、欧米列強とは異なる新日本文化を建設することを目的とし、舞楽、古典舞踊、新舞踊、洋舞の各部門を設定し、専門家に鑑賞用の新たな曲および舞踊の創作を委嘱している。「建国音頭」はこれら鑑賞用の舞踊とは異なり、国民が自ら家庭、神社、学校、工場等で踊る「国民舞踊」とされ、児童を含め一般の人々が受容しやすく踊りやすいことが必要であった。本研究ではこの点に着目し、当時の文献資料 (音声含) から踊りと音楽を分析し、当時の日本における舞踊と音楽における「建国音頭」の位置づけを考察した。

「建国音頭」の音楽については先行研究があり、いわゆる「ヨナ抜き音階」の曲で日本人になじみやすく、三味線と洋楽器による混成楽団により演奏され、人気芸妓歌手により歌われる特徴が報告されている (上田誠二, 2007, 「音楽教師から敵視されたメロディの教育化 : 「東京音頭」から「建国音頭」へ」, 教育学研究 74 (1), 13-27)。これは当時隆盛していた新民謡の系譜にあり、特に昭和 8 年に全国で大流行した「東京音頭」を想起させる当時のポップな音楽と位置付けられる。本研究では踊りについて、振付をした小寺融吉による足運び図と解説および数枚の写真から踊りを再現し、各動作の由来を分析した。その結果、一般的な盆踊りと同様輪踊りであることと、身体の向きが変化する、片足を挙げ両手で両股を打つ、片手を横に伸ばしもう一方の手を胸の前まで折り曲げるといった動作が民俗舞踊 (盆踊り) と類似していること、腰に手をあてる動作が洋舞由来であり明治期以来小学校教育で行われていた遊戯舞踊 (国民舞踊) の動作であると考えられること、および奉祝を示す万歳の動作が見出された。すなわち奉祝を祝う国民舞踊としての建前を保持し、民俗舞踊および遊戯舞踊 (国民舞踊) の動作をもモザイク状に埋め込むことで和洋折衷による新日本文化とし、大衆が娯楽として楽しめる踊りをめざした小寺の意図が強く反映されていると結論した。